

TOTTORI KETAKA AOYA

鳥取県気高郡青谷町

青谷町内遺跡発掘調査報告書II

(NAGOUSE TANIDA
長和瀬谷田所在遺跡試掘調査
OOGUTI
及び大口第3遺跡試掘調査)

1993.3

鳥取県気高郡

青谷町教育委員会

序 文

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助及び県補助を受けて、平成4年度に実施した「青谷町内遺跡」の試掘調査記録であります。

青谷町は、自然環境にも恵まれ、東西の丘陵に挟まれた地域には、多くの有形・無形の文化遺産も残されています。近年は、社会の進展に伴い、各種開発事業が計画・実施され、埋蔵文化財の保護と開発との調整を図るための発掘調査を継続的に実施しているところで

す。今回の調査は、長和瀬漁業集落環境整備事業・飲雑用水管理棟新設工事に伴う長和瀬谷田所在遺跡、及び牛舎建設用地造成に伴う大口第3遺跡の試掘調査です。この調査の結果、長和瀬谷田所在遺跡では遺構は検出されませんでした。周辺には遺跡の存在する可能性も濃厚になったと考えられます。また、大口第3遺跡では竪穴住居跡3基、土壇1基、古墳周溝2基を検出し、周辺の大口第1・第2遺跡、カヤマ遺跡などとの関連性を解き明かしていくうえで貴重な資料を与えてくれました。

さらに、次年度以降には各関係者と協議のうえ試掘調査及び全面発掘調査を計画し、文化財の保護に努力いたす所存であります。

この調査に当っては、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や調査員、作業員の方々の熱意や努力によりようやく調査を終えることができました。ここに深く感謝を申し上げます。次第であります。

なお、この報告書は不十分な所も多くありますが、私たちの郷土理解に役立てていただくとともに、今後の調査研究の参考となれば幸いです。

平成5年3月

青谷町教育委員会

教育長 山田正信

例 言

1. 本報告書は、平成4年度国庫補助及び県補助を受けて青谷町教育委員会が実施した青谷町内遺跡発掘調査の記録である。
2. 本発掘調査事業は、長和瀬漁業集落環境整備事業・飲雑用水管理棟新設工事に伴う長和瀬谷田所在遺跡、及び牛舎建設用地造成に伴う大門第3遺跡の範囲と性格を確認し、工事との調整を図るために行った試掘調査である。
3. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの指導と協力を得た。
4. 本書の作成は、調査員の坂根・森が協議しながら、執筆・編集を行った。
5. 本書に使用した方位は磁北で、実測図の縮尺は原則として遺構1/80、遺物1/3で示し、土色及び土器類等色調を表すには農林水産技術会議事務局監修「標準土色板」によった。地図は、国土地理院の承認を得て作成された「青谷町全図」の5万分の1の地図を使用した。
6. 本書における遺構、遺物等の略号は次のように示す。
T：トレンチ SI：竪穴住居跡 SD：溝 SK：土壇 P：ピット
Po：土器
7. 発掘調査で得られた日誌・図面・写真・遺物等は、青谷町教育委員会が保管する。

調査関係者

調査主体	青谷町教育委員会
調査団長	山田 正信（青谷町教育委員会教育長）
調査員	坂根 善男（青谷町文化財保護審議会会長） 森 佳樹（青谷町教育委員会事務局生涯学習課社会教育主事）
事務局	横川 恒雄、森 佳樹、徳原 一実、幸山 智子 （以上青谷町教育委員会事務局生涯学習課）
調査指導	鳥取県教育委員会事務局 文化課 鳥取県埋蔵文化財センター
作業協力	岡田美津枝、岡村百合子、葦光 照代、谷口 清野、船越千代野、 山根喜美代、山根 静香（以上大坪）、森 千恵子（網見） 伊藤 節子（早牛）、石井よしの（青谷）

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の概要	5
第1節 長和瀬谷田所在遺跡	5
(1) 調査の方法	5
(2) トレンチの概要	5
第2節 大口第3遺跡	7
(1) 調査の方法	7
(2) トレンチの概要	8
第4章 まとめ	16
(1) 長和瀬谷田所在遺跡	16
(2) 大口第3遺跡	16

挿図目次

挿図1 青谷町遺跡分布図	3
挿図2 長和瀬周辺位置図	4
挿図3 長和瀬谷田所在遺跡トレンチ配置図	5
挿図4 長和瀬谷田所在遺跡トレンチ平面図及び土層図	6
挿図5 大口第3遺跡第2トレンチ平面図及び土層図	8
挿図6 大口第3遺跡第14トレンチ平面図及び土層図	8
挿図7 大口第3遺跡試掘トレンチ配置図	9
挿図8 大口第3遺跡第5トレンチ土層図(北側壁)	11
挿図9 大口第3遺跡第6トレンチ土層図(北側壁)	11
挿図10 大口第3遺跡第10トレンチ平面図及び土層図	11
挿図11 大口第3遺跡第8トレンチ平面図及び土層図	12
挿図12 大口第3遺跡第9トレンチ平面図及び土層図	13
挿図13 大口第3遺跡第15トレンチ平面図及び土層図	13
挿図14 大口第3遺跡第16トレンチ平面図及び土層図	14
挿図15 大口第3遺跡第20トレンチ平面図及び土層図	15

挿図16	大口第3遺跡第21トレンチ土層図(南側壁)	15
挿図17	大口第3遺跡第22トレンチ平面図及び土層図	15
挿図18	大口第3遺跡第23トレンチ土層図(北側壁)	16
挿図19	長和瀬谷田所在遺跡出土遺物実測図	18
挿図20	大口第3遺跡出土遺物実測図1	18
挿図21	大口第3遺跡出土遺物実測図2	19

表 目 次

表1	大口第3遺跡試掘トレンチ一覧表	7
表2	長和瀬谷田所在遺跡出土遺物観察表	20
表3	大口第3遺跡出土遺物観察表1	21
表4	大口第3遺跡出土遺物観察表2	22
表5	大口第3遺跡出土遺物観察表3	23

図 版 目 次

図版1	長和瀬谷田所在遺跡遠景 トレンチ完掘状況	24
図版2	大口第3遺跡遠景 トレンチ完掘状況(T2、T6)	25
図版3	大口第3遺跡トレンチ完掘状況(T8、T10、T14)	26
図版4	大口第3遺跡トレンチ完掘状況(T15、T16)	27
図版5	大口第3遺跡トレンチ完掘状況(T20、T22、T23)	28
図版6	長和瀬谷田所在遺跡出土遺物	29
図版7	大口第3遺跡出土遺物1	29
図版8	大口第3遺跡出土遺物2	30
図版9	大口第3遺跡出土遺物3	31

第1章 調査に至る経過

(1) 長和瀬谷田所在遺跡

1992年12月、青谷町大字長和瀬谷田内の畑66㎡において、長和瀬漁業集落環境整備事業・飲雑用水管理棟を新設する計画が、町水道課から町教育委員会へもたらされた。

この地域は、1992年2月に行われた一般国道9号青谷・羽合道路計画に伴う事前踏査で、土器等散布地として確認されていた。

このため、1993年1月、埋蔵文化財についての事前協議を行い、試掘調査を行うこととなった。調査期間は、1993年1月21日から1月27日である。

(2) 大口第3遺跡

1991年11月に谷口利大氏から樹園地4,752㎡、また1992年11月に尾崎泰仁氏・高田理明氏から山林4,042㎡において牛舎建設用地造成する計画が、町教育委員会へもたらされた。

この地域は、1978年の広域農道新設計画に伴う事前踏査で古墳の存在が確認され、また周辺の大口第1遺跡発掘調査(1985年)・大口第2遺跡発掘調査(1989年)によって弥生時代から古墳時代・奈良時代の遺跡が確認されている。

このため、土地所有者と事前協議を行い、試掘調査を行うこととなった。調査期間は、1993年2月4日から3月16日である。

第2章 遺跡の位置と環境

青谷町は、鳥取県の中央よりやや東に位置し、東部地域の西端、旧国名でいえば因幡国に属し、伯耆国との国境にある。北は日本海に面し、東は気高町、西は泊村・東郷町、南は鹿野町・三朝町に隣接し、東西約7.7km、南北約13kmと南北に長く、面積約68.3km²の町である⁽¹⁾。

町の南域は標高500mを越す山地で、そこから北へ伸びる溶岩台地が町の東西を取り囲み町界をなしている。溶岩台地の北端は長尾鼻、オゴノ鼻と続き、30mをこえる断崖となって日本海に突出している。また、溶岩台地の東を口置川、西を勝瀬川が流下し、河口近くで合流し日本海に注いでいる。合流地点付近に沖積平野、海岸部に砂丘が形成されている。町内の砂浜は、全国的にも珍しい鳴り砂の浜として知られている⁽¹⁾。

町内の遺跡は、確認されているものだけでも約300カ所あり、その大半は古墳である。

今回調査した長和瀬谷田所在遺跡(1)は、長和瀬川流域の狭い谷間にあたり、西側丘陵の

山裾に位置する。東側丘陵の東側斜面の長谷古墳群(2)では14基の古墳が存在し、1988年の農農道新設工事に伴う発掘調査で横穴式石室4基、箱式石棺2基が検出されている⁽¹²⁾。また、西側丘陵上には土器等散布地(3)が、長和瀬川上流に位置する網見部落周辺では縄文時代の石皿・石斧の出土地(3)、釜ノ口古墳群(3)が確認され、この谷間にも遺跡が存在する可能性がある。

また、大口第3遺跡(4)は、日置川によって形成された東側の沖積平野南端部西方の丘陵から東へ向かって派生した尾根の山裾に位置する。大口第3遺跡は、大口古墳群(5)の範囲内にあり、尾根続きの丘陵上には大口第1遺跡(6)、大口第2遺跡(7)が存在する。大口第1・第2遺跡は、1984年・1988年に発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代にかけての土城墓や多数の貯蔵穴、竅穴住居跡、墳墓などが検出されている⁽¹³⁾。また、カヤマ遺跡(8)も同じ丘陵の山裾にあり、南東に250mしか離れていない。カヤマ遺跡は1981年発掘調査が行われ、弥生時代後期から奈良時代にかけての住居跡や古墳などが検出されている⁽¹⁴⁾。南には早牛遺跡(2)、早牛古墳群(2)、すぐ北には大坪古墳群(2)が存在し、この大口第3遺跡の周辺は、弥生時代後期から古墳時代、さらに奈良時代以降へつながる遺跡の集中地帯で、時代ごとの遺跡の相互関係を検討できる貴重な地域である。

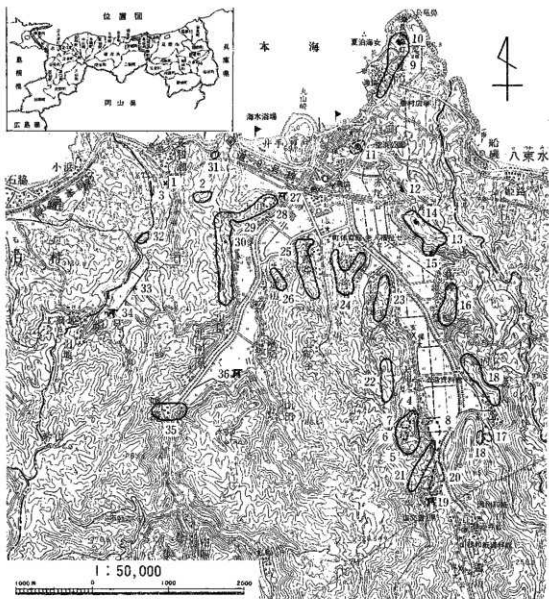
そのほかの青谷町内の主な遺跡は、次のとおりである。

旧石器時代の遺跡は、今のところ確認されていない。縄文時代の遺跡としては、砂丘地にある青谷高校の井戸掘り作業中偶然に発見された青谷第1遺跡(1)がある。ここでは、縄文時代中期から弥生時代、古墳時代にかけての土器片が出土している⁽¹⁵⁾。このほか縄文時代の遺跡としては、網見部落周辺の石皿や石斧の出土地がある。

弥生時代の遺跡は、大口第3遺跡周辺の大口第1遺跡、大口第2遺跡、カヤマ遺跡、早牛遺跡、相屋神社(2)近くの青谷第4遺跡(2) (ほぼ完形の壺を出土)、前述の青谷第1遺跡、1981年に発掘調査が行われた蔵内水船遺跡(1)、網見部落周辺の土器・石斧出土地、北河原での挟入石斧出土地などがある。

古墳時代には、町の中央と東西の丘陵やその山裾に多数の古墳が造営された。今のところ古墳や集落・散布地などの分布は、海岸から6km以内に限られている。町内の古墳は、ほとんどが直径10～20mの円墳と思われ、海岸に向けて伸びる3つの丘陵台地上ないしは山裾に存在する。

東側の台地・丘陵上には、北側から町内最大の前方後円墳長尾鼻1号墳(0) (長さ34m)を有する長尾鼻古墳群(9)、町内第2の前方後円墳東山古墳(2) (青谷2号墳、全長28m)、前方後円墳である阿古山2号墳(1) (全長23.5m)と船や尿などの線刻壁画がほどこされて泉史跡に指定されている阿古山22号墳(5)⁽¹⁶⁾ (全長6.1m、奥壁幅2.5m、高さ3.0m)を有する阿古山古墳群(3)、養郷古墳群(16)、蔵内古墳群(16)と続く。



- | | | | |
|--------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 長和瀬谷田所在遺跡 | 10. 長尾鼻1号墳 | 19. 利川神社 | 28. 青谷第4遺跡 |
| 2. 長谷古墳群 | 11. 青谷第1遺跡 | 20. 早牛遺跡 | 29. 吉川古墳群 |
| 3. 長和瀬寺田散布地 | 12. 東山古墳 | 21. 早牛古墳群 | 30. 吉川43号墳 |
| 4. 大口第3遺跡 | 13. 阿古山古墳群 | 22. 大坪古墳群 | 31. 水無瀬古墳群 |
| 5. 大口古墳群 | 14. 阿古山2号墳 | 23. 奥崎古墳群 | 32. 釜ノ口古墳群 |
| 6. 大口第1遺跡 | 15. 阿古山22号墳 | 24. 善田古墳群 | 33. 石皿出土地 |
| 7. 大口第2遺跡 | 16. 養郷古墳群 | 25. 露谷古墳群 | 34. 幡井神社 |
| 8. カヤマ遺跡 | 17. 蔵内水船遺跡 | 26. 亀尻古墳群 | 35. 鳴滝古墳群 |
| 9. 長尾鼻古墳群 | 18. 蔵内古墳群 | 27. 相屏神社 | 36. 神崎神社 |

挿図1 阿古町遺跡分布図

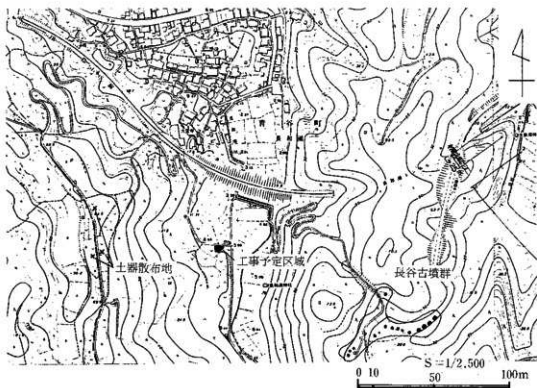
次に中央の丘陵には、北から露谷古墳群④、その西に亀尻古墳群⑤、東に善田古墳群⑥があり、さらに南東には町の史跡指定の奥崎古墳群⑦、大坪古墳群、大口古墳群、早牛古墳群が連なっている。また、台地を挟んで反対の西側の谷に面した山裾には、金環が出土した鳴滝古墳群⑧がある。

最後に西側の丘陵上には、相屋神社から南方の丘陵上に約80基の古墳が連なる吉川古墳群⑨があり、その西側の丘陵上には北から水無瀬古墳群⑩、長谷古墳群、釜ノ口古墳群と続いている。

この時代の古墳以外の遺跡は、縄文・弥生時代の項で述べたように、背谷第1遺跡、大口第1遺跡、大口第2遺跡、カヤマ遺跡、早牛遺跡が主なものである。

奈良時代の遺跡としては、カヤマ遺跡があるのみで、遺物の発見も少ない。

歴史上の資料としては、因幡国の官道に置かれた4カ所の駅のうちの「柏尾駅」の有力な候補地と言われる相屋神社周辺や、勝部・日置といった部民制度に由来するといわれる郷名が残っている¹⁷⁾。また、やや時代は下るが、町内の式内社である利川神社⑪と幡井神社⑫がそれぞれ早牛・絹見に、式外社である相屋神社と神前神社⑬がそれぞれ背谷・鳴滝にあることは、遺跡との関わりが考えられる¹⁷⁾。



挿図2 長和瀬周辺位置図

第3章 調査の概要

第1節 長和瀬谷田所在遺跡

(1) 調査の方法

この試掘調査は、長和瀬漁業集落環境整備事業・飲雑用水管理棟新設工事に伴って工事予定区域内において実施した。

この地域は、長和瀬川の流域の狭い谷間で、西側丘陵の山裾に位置する。この地域では土器等の散布が確認され、また西側丘陵の台地上に土器等散布地が、東側丘陵の東側山裾には長谷古墳群が存在している。

このため、工事は盛土で施工する計画であったが、遺跡の範囲と性格を確認するため、トレンチによって調査した。

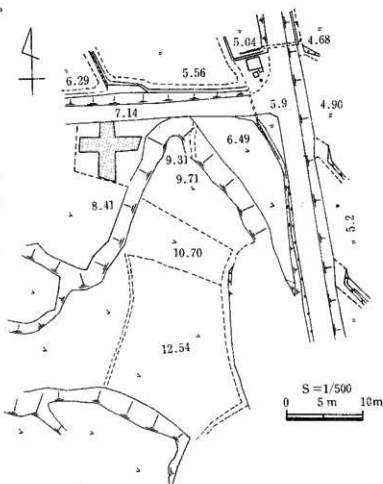
トレンチは、工事区域内に幅2.0mで十字状に設定し掘り下げた。

(2) トレンチの概要

このトレンチ位置は、南から北方向に緩やかに傾斜し、また西から東方向に僅かに傾斜している。

この土地は、畑として耕作され、旧耕作土が堅かったため以前に砂混じりの土を入れて耕作したことが、土地所有者から聞かれた。

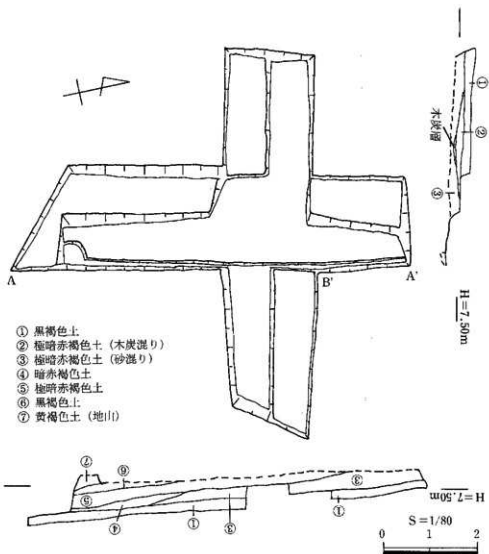
まず、耕作土第1層を掘り下げた。そこでサブトレンチを設定し、順次掘り下げた。約70cm掘り下げたところで地山と見られる第7層黄橙色土に達した。土層



挿図3 トレンチ配置図

から判断して、第5層が旧耕作土、第3・4層が新たに搬入した耕作土である。第5層・第6層は堆積土層と考える。いずれも地盤の傾斜にほぼ平行である。第7層を南端部で確認したのち、湧水も著しく掘り下げを終了した。このトレンチでは、遺構は確認できなかった。

土器は、第1～3層で土師器、須恵器のほか近世の陶器⁹⁾の小片が出土した。第5・6層では、土師器・須恵器の小片が出土した。土器はいずれも小片で、図化できるものは第5・6層出土の須恵器の坏身片 (Po1)、蓋杯片 (Po2)、第1～3層出土の土師質土器皿の底部 (Po3)、土錘 (Po8)、陶器片 (Po4～7) である。



挿図4 トレンチ平面図及び土層図

第2節 大口第3遺跡

(1) 調査の方法

この試掘調査は、牛舎建設用地造成に伴って、造成予定区域内において実施した。

この地域は、1978年の広域農道新設計画に伴う事前踏査により、10基の古墳の存在が確認され、また1989年には尾根続きの山頂で大口第2遺跡（墳墓9基、竪穴住居跡2基、袋状土壌5基）を検出している。

まず、最初に谷口利夫氏所有の樹園地にトレンチを設定した。この樹園地では、1基の古墳の存在が確認され、1992年3月の本造成計画に伴った事前踏査では山裾から土器片を表採した。このため、丘陵上に第1～4トレンチ、中腹に第5～7トレンチ、山裾に第6・8トレンチを設定し、順次掘り下げた。8本のトレンチでは、第8トレンチで竪穴住居跡を検出し、第5・6トレンチで土器片が出土した。この結果、遺跡の範囲を確認するため、第9～14トレンチを増設し、掘り下げた。第9トレンチで竪穴住居跡を検出し、第10・11トレンチで土器片を出土したほか、遺構の検出はできなかった。

続いて、尾崎泰仁氏・高田理明氏所有の山林にトレンチを設定した。この地域では、調査期間及び事業費の範囲内で、谷口氏所有地の第8トレンチで検出した遺跡の範囲を確認するため、丘陵山裾地域を中心に9本のトレンチを設定した。この結果、第15トレンチで竪穴住居跡、第20トレンチで土壌、第22・23トレンチで古墳の周溝を検出した。

トレンチ番号	トレンチの規模(m)	遺構	遺物	トレンチ番号	トレンチの規模(m)	遺構	遺物
T1	1.5×6.0	なし	なし	T13	1.5×5.0	なし	なし
T2	1.5×4.0	なし	なし	T14	1.2×2.5	なし	なし
T3	1.5×4.0	なし	なし		1.2×2.5		
T4	1.5×6.0	なし	なし	T15	1.5×4.0	竪穴住居跡1	弥生土器片及び須恵器片
				T5	1.5×6.0	なし	土器片
T6	1.5×6.0	なし	弥生土器片及び須恵器片	T16	1.5×4.0	なし	弥生土器片
T7	1.5×4.0	なし	なし	T17	1.5×3.0	なし	弥生土器片
				T8	1.5×6.0	竪穴住居跡1	弥生土器片及び土師器・須恵器片
T9	1.5×6.0	竪穴住居跡1	弥生土器片	T18	1.5×4.0	なし	土師器片
T10	1.5×4.0	なし	弥生土器片	T19	1.5×3.0	なし	土師器片及び須恵器片
				T20	1.5×4.0	土溝1	弥生土器片
T11	1.5×4.0	なし	弥生土器片及び須恵器片	T21	1.5×4.0	なし	弥生土器片
T12	1.0×3.0	なし	なし	T22	1.5×3.0	周溝	土師器片及び須恵器片
				T23	1.2×5.0	周溝	土師器片

表1 試掘トレンチ一覧表

トレンチの規模は、1.5m×6.0mを基準としたが、地形や遺構の検出状況によって変更した。

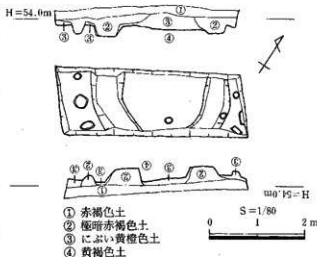
(2) トレンチの概要

第1～3、及び第13トレンチ

北東に伸びる丘陵上に位置する。ここでは、第2トレンチ設定位置で1955年(昭和30年)頃、梨園開墾時に石棺が発見され破壊したことが所有者から聞かれた。また、1955年以前にも梨園が耕作されており、二度にわたる開墾のための削平が見られると考える。

各トレンチを掘り下げたが、約30～50cmで地山と思われる黄褐色土(真砂土)に達し、遺構・遺物とも検出できなかった。

埋葬施設・周溝等は開墾時に削平されたと考える。また、各トレンチで検出した穴及び溝と思われるものは、ナイロン製の紐や肥料等が混入し、梨耕作時の攪乱である。



挿図5 第2トレンチ平面図及び土層図

第4及び第14トレンチ

第2トレンチから北北東に伸びる尾根続きに位置する。

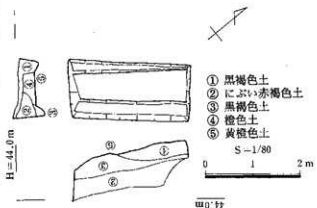
各トレンチを掘り下げたが、約30～50cmで地山に達した。第2トレンチ同様、穴は肥料穴であると確認できた。また、第14トレンチの2条の溝は、梨栽培時に隣接山林からの根の混入をさけるために掘り込まれたものである。

各トレンチでは遺構・遺物とも検出できなかった。

第5トレンチ

第5トレンチは、第14トレンチ東側の斜面中腹に位置する。

このトレンチでは、ほぼ斜面に



挿図6 第14トレンチ平面図及び土層図



挿図7 試掘トレンチ配置図

沿って約60cmで地山に達したが、遺構は検出できなかった。遺物は、第2層堆積土から土師器底部片(Po1)が出土したが、転落によるものと思われる。

第6及び第11トレンチ

第5トレンチの東側山裾に位置する。第6トレンチでは、約70~90cmで地山に達した。このトレンチでは、遺構は検出できなかった。遺物は、第1~5層で弥生土器小片約30点、須恵器杯片が出土したが、図化できるものは甕(Po2)、器台(Po3)、底部(Po4)のみである。

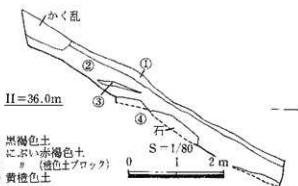
第11トレンチでは、約70cmで地山に達した。遺構は検出できなかった。

遺物は、弥生土器小片3点、須恵器小片1点が出土したが、図化できるものはなかった。

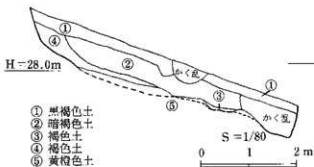
第10トレンチ

第10トレンチは、第6トレンチの南東に位置する。

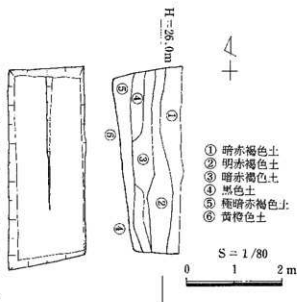
このトレンチでは、70~110cm掘り下げた所で黒褐色土層に達した。この黒褐色土は、第2トレンチ設定頂上部から北北東及び東に伸びる尾根に挟まれた谷間の堆積土と考えられる。この層は約20cmで地山に達したが、遺構は検出できなかった。遺物は、第3層で土器片8点が出土したが、図化できたのは甕(Po13)のみであった。



挿図8 第5トレンチ土層図(北側壁)



挿図9 第6トレンチ土層図(北側壁)



挿図10 第10トレンチ平面図及び土層図

第7及び第12トレンチ

このトレンチは、頂上部から東に伸びる尾根上に位置する。

各トレンチでは、約20～50cmで地山に達した。遺構・遺物とも検出できなかった。

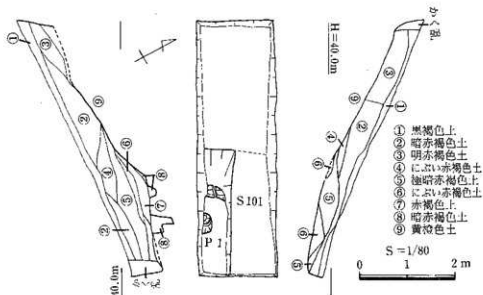
第8トレンチ

第8トレンチは、第3トレンチの東側山裾に位置する。

このトレンチでは、約50cm掘り下げた所で竪穴住居跡（S I01）を検出した。このトレンチでは、平面プランは判断できなかったが、壁溝及び主柱穴と思われるP1を検出した。壁高は60cmを測り、ピットの規模はP1（40×22×25）cmである。

遺物は、第2・4層で弥生土器、土師器、須恵器の小片、第5層以下（遺構内埋土）で弥生土器片を多数出土した。このうち図化できるものは甕（Po5）、壺（Po6）、土師器甕（Po7・布留式）、須恵器坏身（Po8）のみである。

竪穴住居跡の時期は、出土遺物により弥生時代後期～末期と考える。

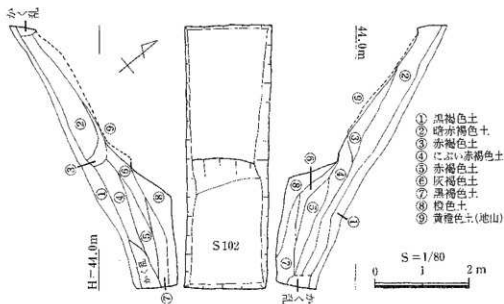


挿図11 第8トレンチ平面図及び土層図

第9トレンチ

第9トレンチは、第3トレンチと第8トレンチの中間、丘陵中腹に位置する。

このトレンチでは、約70cm掘り下げたところで竪穴住居跡（S I02）を検出したが、柱穴及び壁溝は確認できなかった。壁高は90cmを測る。遺物は、第6～8層で弥生土器片約20点が出土したが、図化できたものは甕（Po10）、壺（Po11）、手づくね土器（Po12）のみである。竪穴住居跡の時期は、出土遺物により弥生時代後期～末期と考える。



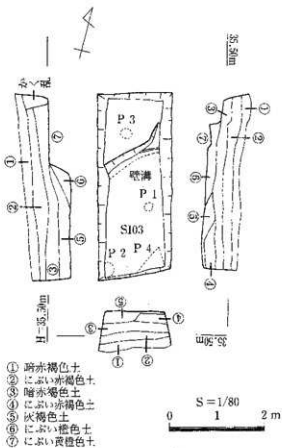
挿図12 第9トレンチ平面図及び土層図

第15トレンチ

第15トレンチは、第8トレンチの東側山裾に位置する。

このトレンチでは、約55cm掘り下げたところで竪穴住居跡 (SI03) を検出した。床面まで掘り下げたところ、柱穴と思われるP1~3、壁溝を確認したが、埋土は掘り下げなかった。中央ピットと思われるP4が、トレンチ南東隅に確認できた。壁高は40cmを測る。遺物は、第1~3層で弥生土器片及び須恵器片を、第4層以下 (遺構内埋土) で弥生土器片を多数出土した。凶化できたものはわずかに壺 (Po14~21)、器台 (Po22) である。また、玉類を製造するための原料となり得る緑青色の石小片が第3層で出土した。

竪穴住居跡の時期は、出土遺物により弥生時代後期~末期と考える。



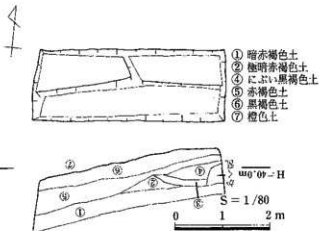
挿図13 第15トレンチ平面図及び土層図

第16トレンチ

第16トレンチは、第8トレンチの南に位置する。

第16トレンチでは、約30cm掘り下げたところで、やや落ち込む段状を確認したが、遺構とは判断できなかった。さらに約40cm掘り下げ、地山に達した。

遺物は、第4層で一個体の弥生土器の壺 (Po24) がつぶれた状態で出土したほか、土器片が14点出土したが、図化できるものはPo24、甕 (Po23) のみであった。



挿図14 第16トレンチ平面図及び土層図

第17トレンチ

第17トレンチは、第16トレンチの南に位置し、第16トレンチの段状を確認するために設定した。

第17トレンチでは、第16トレンチと同様に段状を確認したが、遺構は検出できなかった。

遺物は、第3層 (暗赤褐色土) で土器小片21点が出土したが、図化できるものは甕 (Po25) のみである。

第18トレンチ

第18トレンチは、第16トレンチの西側の丘陵中腹に位置する。

第18トレンチでは、約40~50cm掘り下げたところで地山に達したが、遺構は検出できなかった。遺物は、土器小片数点が出土したが、図化できるものはなかった。

第19トレンチ

第19トレンチは、第18トレンチから小さな谷を挟んだ南側に位置する。

第19トレンチでは、約50cm掘り下げ地山に達したが、遺構は検出できなかった。遺物は、第2層 (暗赤褐色土) で土師器・須恵器の小片3点が出土したが、図化できるものはなかった。

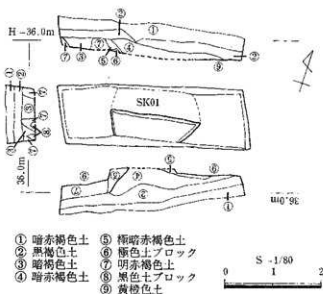
第20トレンチ

第20トレンチは、第15トレンチの南で谷間の対岸部に位置する。

第20トレンチでは、約60cm掘り下げたところで、土壌(SK01)を検出した。検出面では直径180cmと推定できるが、上部は削平された可能性もある。また、遺構内埋土は掘り下げなかった。

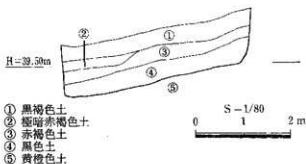
遺物は、土器片が多数出土した。このうち図化できたものはわずかで甕 (Po26~Po29)、壺 (Po30)、高杯 (Po31)、器台 (Po32) である。

出土遺物から、時期は弥生時代後期~末期と考えられる。



- ① 暗赤褐色土
- ② 黒褐色土
- ③ 暗褐色土
- ④ 暗赤褐色土
- ⑤ 極暗赤褐色土
- ⑥ 極赤褐色土
- ⑦ 明赤褐色土
- ⑧ 黒色土ブロック
- ⑨ 黄褐色土

挿図15 第20トレンチ平面図及び土層図



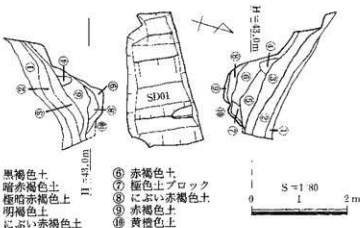
- ① 黒褐色土
- ② 極暗赤褐色土
- ③ 赤褐色土
- ④ 黒色土
- ⑤ 黄褐色土

挿図16 第21トレンチ土層図 (南側壁)

第21トレンチ

第21トレンチは、第17トレンチの南で谷間の対岸部に位置する。

第21トレンチでは、第19トレンチと同様約60cm掘り下げたところで第4層黒褐色土に達し、さらに約30cmで地山に達した。黒褐色土は、堆積土層と考える。遺物は、第3層から土器片21点が出土したが、図化できるものはなかった。



- ① 黒褐色土
- ② 暗赤褐色土
- ③ 極暗赤褐色土
- ④ 明褐色土
- ⑤ におい赤褐色土
- ⑥ 赤褐色土
- ⑦ 極色土ブロック
- ⑧ におい赤褐色土
- ⑨ 赤褐色土
- ⑩ 黄褐色土

第22トレンチ

第22トレンチは、南側

挿図17 第22トレンチ平面図及び土層図

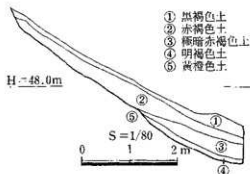
から北東に伸びる尾根上に位置する。このトレンチは、大口1号墳の周溝の確認のため設定した。

第22トレンチでは、第3層まで約60～80cm掘り下げたところで周溝と思われる溝(SD01)を確認した。SD01は、幅180cm、深さ80cmを測るが、以前の梨園開墾時に削平されていると思われる。遺物は、表土から土師器片及び須恵器坏身片(Po37)が出土した。図化できたものは坏身片(Po37)のみである。

第23トレンチ

第23トレンチは、第22トレンチの西南西に位置し、大口17号墳の周溝の確認のため設定した。

第23トレンチでは、約50cm掘り下げたところで周溝と思われる溝(SD02)を確認した。SD02は、幅220cm、深さ45cmを測るが、第22トレンチと同様に以前の梨園開墾時に削平されていると思われる。遺物は、土師器片を1点出土したが、図化できなかった。



挿図18 第23トレンチ土層図(北壁面)

第4章 まとめ

(1) 長和瀬谷田所在遺跡

今回試掘調査を行った範囲については、遺構を検出できなかったが、堆積土層から土師器、須恵器、近世の陶器・磁器の破片が出土している。

また、この調査区域は周囲に比べて僅かに低くなっており、土器片は周辺から流入したものであると考えられる。

このため、周辺には遺跡の存在する可能性が濃厚になり、今後の開発事業等計画時には、再度試掘調査を行う必要がある。

(2) 大口第3遺跡

今回試掘調査を行った区域は、1988年発掘調査を実施した大口第2遺跡から北東側及び東側に伸び出した丘陵上及び山裾に位置する。この区域を大別すると、北東に伸び出した丘陵上の樹園地区域(A)、山林区域(B)、東側に伸び出した丘陵上(C)、樹園地頂上部

から東に伸びる尾根を境として北側山裾部（D）、南側山裾部（E）に分けられる。

まず、A地区内に第1～4・13・14トレンチを設定し掘り下げたが、ここでは遺構・遺物は検出できなかった。この樹園地内の丘陵上には、樹園地開墾時に大口18号墳が発見・破壊されているが、その痕跡も見られないことから、度重なる削平によって遺跡の残存する可能性もないと判断する。

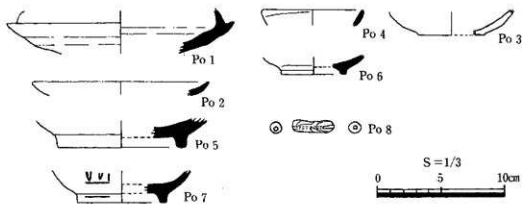
続いてD地区内では第5～7・10～12トレンチを設定し掘り下げた。この区域では遺構は検出できなかったが、堆積土層内で土器片が多数出土した。これは、転落によるものと考えられ、丘陵上には弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓が存在したと考えられる。

次に、E地区内では第8・9・15～21トレンチを設定し掘り下げた。この区域では、第8・9及び第15トレンチで竪穴住居跡、第20トレンチで土壇1基を検出した。これらは出土遺物から、いずれも弥生時代後期から末期にかけての遺構と考えらる。また、土師器・須恵器片が堆積土層から出土し、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡が存在する可能性が強まったと言える。

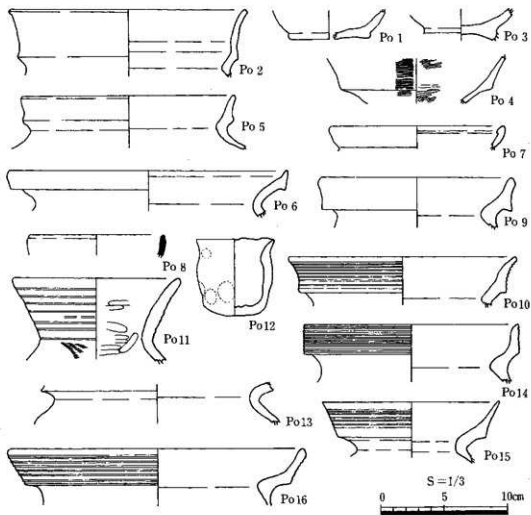
最後に、C地区では第22・23トレンチで古墳の周溝が検出された。しかし、B及びC地区の古墳・遺跡の確認は、調査事業費及び調査期間のが限られたため、次年度以降の調査により、考察を加えたい。

参考文献等

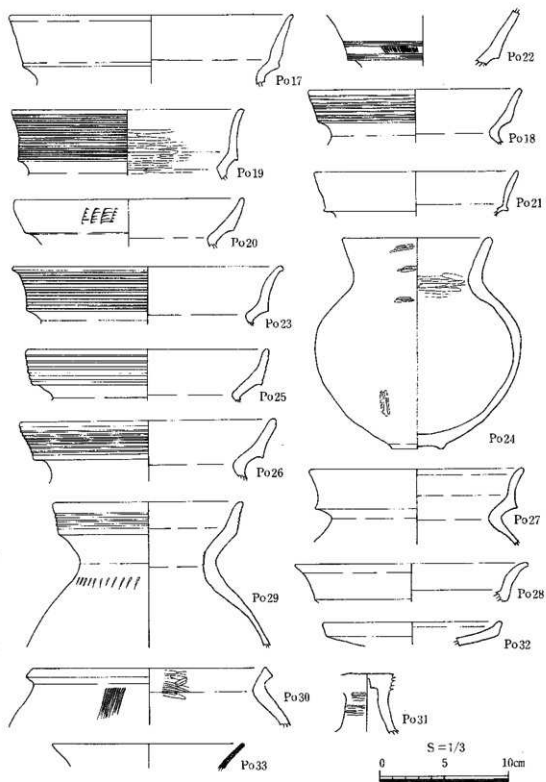
- (1) 『青谷町誌』 青谷町誌編さん委員会 1984年
- (2) 『長谷古墳群発掘調査報告書』 青谷町教育委員会 1989年
- (3) 『大口古墳群発掘調査報告書』 青谷町教育委員会 1985年
- (4) 『大口遺跡群発掘調査報告書』 青谷町教育委員会 1989年
- (5) 『カヤマ遺跡試掘調査報告書』 青谷町教育委員会 1982年
- (6) 『鳥取県の古墳』 鳥取県埋蔵文化財センター 1986年
- (7) 『鳥取県史』1 原始・古代 鳥取県
- (8) 鳥取県立博物館学芸員 久保穰二郎氏、ご指導による。



挿図19 長和瀬谷田所在遺跡出土遺物実測図



挿図20 大口第3遺跡出土遺物実測図1



挿図21 大口第3遺跡出土遺物実測図2

出土位置	土器番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	①納土、②焼成、③色調	備考
5層	Fb 1	51	須恵器 杯身片	①17.8㎜ ②3.3△	立上がりはやや内湾しながら立ち上がる。端部は丸い。受部に外反し、端部は丸い。	内外面…回転ナデ。底面外側はハタリ。	①密、石灰灰を含む。②灰緑③青灰色	
	Fb 2	52	須恵器 皿	①13.8㎜ ②1.1△	端部はやや内湾し、丸くおさめる。	内外面…回転ナデ。	①緻密。②良好③暗赤褐色	
3層	Fb 3	32	土師器 皿底部	②1.8△ ④5.1㎜	平底。	内外面…回転ナデ。底面は平切り。	①緻密。②良好③褐色	
1層	Fb 4	02	陶器 皿片	①7.8㎜ ②1.3△	端部はやや内湾し、丸くおさめる。	内面…貫入が見られる。外面…露胎。	①緻密。②良好③内面灰オリーブ色。外面明赤褐色。	
	Fb 5	01	陶器 底部	②2.4△ ④10.1㎜	断面台形の高台をつける。(唐津)	内面…貫入が見られる。外面…露胎。底部ヘラケスリ。	①緻密。②良好③内面灰オリーブ色。外面明赤褐色。	
	Fb 6	03	陶器 底部	②1.3△ ④5.0㎜	断面台形の高台をつける。(唐津)	内面…貫入が見られる。外面…貫入が見られる。底部露胎。	①緻密。②良好③内外面オリーブ灰色。底部灰褐色。	
3層	Fb 7	33	磁器 底部	②2.5△ ④6.99㎜	断面台形の高台をつける。(伊万里)	外面…割部、高台に染付。	①緻密。②良好③内外面明青灰色。染付青灰色。	
	Fb 8	26	土師器 土皿	長さ3.2 径0.9 穴径0.3	円筒状の土皿。		①密。②良好③褐色	
	Fb 9	34	陶器 片			陶胎染付。 内外面…貫入がみられる。	①緻密。②良好③明緑灰色。染付藍色。	
	Fb10	38	陶器 壺片		(唐津)	外面…格子タタキ目。	①緻密。②良好③内面明褐色。外面暗赤褐色。	
	Fb11	36	陶器 壺片		(備前)		①緻密。②良好③暗赤褐色	
	Fb12	40	陶器 口縁片		端部はやや肥厚し、丸くおさめる。		①緻密。②良好③灰褐色	
	Fb13	42	煎餅片		(唐津)		①緻密。②良好③暗赤褐色	

註…法量の○数字は次のとおりとする。①径、②器高、③割部最大径、④底部径、⑤腹合口縁立上がり長、⑥須恵器杯身基部径、⑦須恵器杯身立上がり高である。また、復元した計測値に※印、残存額にハ印を付した。

表2 長瀬谷田所在遺跡出土遺物観察表

出土位置	土器番号	取上番号	器種	径(量) (cm)	形部上の特徴	手法上の特徴	①胎土、②焼成 ③色調	備考
T 5	Pb 1	01	土師器	① 2.2△ 底径 ④ 6.1※	平底で、肩部はやや外反する。	内外面→ヘラコソコ後回転ナデ。	①褐色。②良好 ③灰赤褐色。	
T 6	Pb 2	01	弥生 甕	①19.4※ ② 5.0△ ③ 3.8	直立気味に外反して外縁する複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部内面の段はゆるやか。肩部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面→ヨコナデ。内面→口縁部へ傾部ヨコナデ。以下ヘラケズリ。	①灰。(1-1mmの石実含む) ②良好 ③明黄褐色。	外面一部スス付着
	Pb 3	02	弥生 甕台	③ 9.5△	外反しながら大きく逆「八」の字に開く口縁部を持つ。口縁下部には丸味のある段を持つ。	内外面→粗かいヨココ方向のヘラミガキ。口縁部外面に傾部平行沈線を施す。	①灰。(1-1mmの石実含む) ②良好③明黄褐色。	
	Pb 4	07	弥生 底部	③ 1.9△	器口の低い高台状の脚部を持つ。	風化著しく不明。	①やや粗。②やや良好③内面褐色。外面橙色。	
T 8	Pb 5	01	弥生 甕	①16.6※ ② 4.1△ ③ 1.9	やや外反して外縁する複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。肩部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面→口縁部平行沈線後ナデ。頸部ヨコナデ。内面→口縁部ヨコナデ。肩部以下ヘラケズリ。	①灰。②良好 ③明黄褐色。	外面一部スス付着
	Pb 6	02	弥生 甕	①11.6※ ② 3.1△ ③ 1.5	外縁し強く立ち上がる複合口縁。口唇端はつまみ出したように丸い。口縁部下縁はやや下曲する。肩部内面は丸味を持って「く」の字状に屈曲する。	外反→ヨコナデ。内面→風化著しく不明。	①灰。(1-1mmの石実含む) ②良好③赤褐色。	
	Pb 7	65	土師器 甕	①13.4※ ② 1.9△	内湾気味に外縁して立ち上がる口縁。口唇端は内方に肥厚し丸い。	内外面→ヨコナデ。	①灰。②良好 ③明赤褐色。	
	Pb 8	67	須恵系 甕	①10.3※ ② 1.6△	立ち上がりは内湾し短い。口縁部は丸い。	内外面→ヨコナデ。	①灰。②良好 ③灰オレンジ色。	
T 8 付添 表様	Pb 9	01	弥生 甕	①14.9※ ② 4.0△ ③ 2.6	外縁して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸い。口縁部下端は下曲する。口縁部内面の段はゆるやか。肩部内面は丸味を持って「く」の字状に屈曲する。	外面→ヨコナデ。内面→ヨコナデ。頸部以下ヘラケズリ。	①灰。②良好 ③④にぶい褐色。	
T 9	Pb10	46	弥生 甕	①17.8※ ② 3.8△ ③ 2.8	外反気味に外縁して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端はわずかに下曲する。口縁部内面の段はゆるやか。肩部内面は丸味を持って「く」の字状に屈曲する。	外面→口縁部は8条の平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。内面→風化著しく不明。	①灰。(1-1mmの石実含む) ②良好③藍色。	
	Pb11	31	弥生 甕	①13.0※ ② 6.4△	真円形。外上方に立ち上がる口縁部。口縁部は丸くおさまる。肩部内面は丸く「く」の字状に屈曲する。	外面→口縁部ヘラミガキ後浅い傾部縦文を施す。肩部には貝状工具?による波状文。内面→ヨココ方向のヘラミガキ。	①灰。②良好 ③淡褐色。	
	Pb12	40	手づくね 上部	① 6.0※ ② 5.9	底面からゆるやかな「S」の字状に立ち上がる靴状のものを作った後、約1.5cmの口縁部を引き出す。底部はやや丸い。	外面→ナデ。頸部及び肩部下位に指頭正横線を施す。内面→ナデ。	①灰。②良好 ③褐色。	

※→径量の○数字は次のとおりとする。①口径、②器高、③胴部最大径、④底径、⑤複合口縁立ち上がり長、⑥須恵系甕身品目径、⑦須恵系甕身立ち上がり高である。また、復元した計測値に※印、残存部に△印を付した。

表3 大口第3遺跡出土遺物観察表1

出土位置	上部番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	①粘土、②焼成、③色調	備考
T10	Rd3	01	弥生 壺	① 3.1△	丸く「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は欠損するが、口縁部下端は外方へ鋭く突出する。	外面…肩部にハケ目。 内面…頸部ヨコナデ。以下ヘラケズリ。	①密。②良好 ③浅黄褐色。	
T15	Rd4	77	弥生 壺	① 16.8△ ② 4.5△ ③ 2.3	直立して立ち上がる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部は9条の平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。以下ヘラケズリ。	①密。(1-1mmの石英含む) ②良好③赤褐色。	
	Rd5	171	弥生 壺	① 14.0△ ② 4.3△ ③ 2.8	やや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部は不明瞭。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は2段に屈曲する。	外面…口縁部は平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…風化著しく不明。	①密。(1-1mmの石英含む) ②良好③浅黄褐色。	
	Rd6	172	弥生 壺	① 23.0△ ② 4.3△ ③ 2.8	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端はゆるやか。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は、「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部は6条の平行沈線後鋭くヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヘラミガキ。以下左方向のヘラケズリ。	①密。(1-1mmの石英含む) ②良好③淡赤褐色。	外面…部スス付着
	Rd7	141	弥生 壺	① 21.8△ ② 5.5△ ③ 4.1	外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部はわずかに外方に肥厚し上端を押える。口縁部下端は外方に突出する。口縁部内面の段はゆるやか。	内外面…ヨコナデ。	①密。②良好 ③紅赤褐色。	
	Rd8	201	弥生 壺	① 15.4△ ② 4.4△ ③ 2.6	外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部は丸い。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部は9条の平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…風化著しく不明。 口縁部にミガキが認められる。頸部以下ヘラケズリ。	①密。(1-1mmの石英含む) ②良好③浅黄褐色。	内外面口縁部赤色雲形痕。
	Rd9	202	弥生 壺	① 18.0△ ② 5.2△ ③ 4.0	外反しながら立ち上がる複合口縁。口唇部はおおむね面を持ち、口縁部下端は下重する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部は多条の平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ方向のミガキが認められる。以下右方向のケズリ。	①密。(1-1mmの石英含む) ③良好④浅黄褐色～灰色。	
	Rd0	203	弥生 壺	① 17.8△ ② 3.6△ ③ 2.6	外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部は丸い。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面…口縁部は貝殻沈線による刻み目の後、ヨコナデ。頸部以下ヨコナデ。内面…ヨコナデ。	①密。(1-1mmの石英含む) ②良好③褐色。	
	Rd1	101	土師器 壺	① 15.8△ ② 3.6△ ③ 3.0	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部は丸い。口縁部下端は鋭く突出する。口縁部内面の段は不明瞭。	内外面…ヨコナデ。	①密。②良好 ③浅黄褐色。	
	Rd2	204	弥生 器台	① 4.1△	わずかに外反しながら大きく立ち上がる複合口縁状を呈する器台。口唇部は欠損。受部下端はわずかに下重する。	全体的に風化が進んでいる。外面…受部下方に刻み目を選んで上下に3条の沈線が認められる。内面…平行ミガキ。	①密。②良好 ③にぶい黄褐色。	
T16	Rd3	01	弥生 壺	① 20.8△ ② 4.5△ ③ 3.5	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。口唇部は丸い。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部は多条の平行沈線を呈す。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。以下左方向ヘラケズリ。	①密。(1-1mmの石英含む) ②良好③にぶい褐色。	

注…法量の○数字は次のとおりとする。①口径、②器高、③胴部最大径、④底径、⑤腹合口縁上がり長、⑥胴部厚さ(器身部厚)、⑦胴部厚(器身立上がり高)である。また、復元した計測値に※印、復元した計測値に△印を付した。

表4 大口第3遺跡出土遺物観察表2

出土位置	土器番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	①胎土、②焼成 ③色調	備考
T16	R21	13	弥生 歩	①11.4 ②16.5 ③15.8 ④3.8	口縁部はゆるやかに外反する。口縁部は丸く、頸部内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲する。頸部は最大直径がやや上位にある。底面はわずかに上げ底。	風化著しく不明。 外底…口縁部ナデ。頸部はヨコ方向のヘラミガキ。胴部はヘラミガキが認められる。内底…口縁部へ頸部はヨコ方向のヘラミガキ。以下ヘラケズリ。	①密。(1-2mmの石英含む) ②良好③明褐色	外面胴部以下スス付着。
T17	R25	04	弥生 甕	①18.8 ②4.0 ③2.8	やや外傾して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は下巻する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部はゆるやか。胴部内面は丸味を持って「く」の字状に屈曲する。	全体的に風化が進んでい外底…口縁部は5条の縦凹線後ヨコナデ。胴部以下ヨコナデ。 内面…口縁部へ頸部ヨコナデ。以下ヘラケズリ。	①密。(1-3mmの石英含む) ②良好③明褐色。	外面一部スス付着
T20	R26	01	弥生 甕	①19.9 ②4.7 ③3.0	外傾して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は斜め下方に巻れる。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外底…口縁部平行凹線後強いヨコナデ。胴部以下ヨコナデ。 内面…口縁部へ頸部ヨコ方向のミガキ。以下ヘラケズリ。	①密。(1-3mmの石英含む) ②良好③褐色。	外面一部スス付着
	R27	31	弥生 甕	①16.4 ②5.7 ③3.1	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は外方に突出する。口縁部内面の段はゆるやか。胴部内面は丸味を持って「く」の字状に屈曲する。	外底…ヨコナデ 内面…口縁部へ頸部ヨコ方向のミガキ。以下ヘラケズリ。	①密。(1-2mmの石英含む) ②良好③明褐色	外面一部スス付着
	R28	33	弥生 甕	①18.2 ②3.0	外反しながら外傾して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は肥厚して丸味をもって頸部へと続く。口縁部内面の段は明瞭。	内外面…ヨコナデ。	①密。(1-3mmの石英含む) ②良好③暗褐色。	
	R29	89	弥生 甕	①14.7 ②11.3 ③2.5	外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端はそのままだに屈曲する。口縁部内面の段はゆるやか。胴部内面は丸味を持って「く」の字状に屈曲し、なだらかな頸部へと続く。	外底…口縁部は胴部が著しく不明瞭。4条以上の平行凹線を認める。胴部に刻文。内面…口縁部へ頸部にヨコ方向のミガキが認められる。以下右方向ヘラケズリ。	①やや粗(1-2mmの石英含む) ②良好 ③明褐色	
	R30	87	弥生 甕	①18.1 ②4.8 ③0.7	外傾しゆるやかに立ち上がる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。頸部は丸味を持って「く」の字状に屈曲する。	外底…口縁部ヨコナデ。胴部はタテ方向のハケミ。内面…口縁部へ頸部ヨコ方向のミガキ。以下ヘラケズリ。	①密。(1-2mmの石英含む) ②良好 ③明褐色。	外面一部スス付着
	R31	102	弥生 高杯	③4.4	「八」の字状に開く筒部。杯部八字及び脚部欠損。杯底面外面に小孔あり。	風化著しく不明。 外底…ヨコ方向のミガキが認められる。 内面…杯接合部ヘラケズリ。以下ナデ。	①密。(1-2mmの石英含む) ②良好③褐色。	
	R32	35	弥生 器台	①13.9 ②1.8	受器は逆「八」の字状に開く。上端部は上方に配厚し丸くおさめる。	風化著しく不明。	①密。(1-2mmの石英含む) ②良好 ③明褐色。	
T22	R33	01	須恵器 甕	①14.9 ②1.8	逆「八」の字状に立ち上がる口縁部。口唇端は丸い。	内外面…凹線ナデ。	①極密。②良好 ③暗褐色	

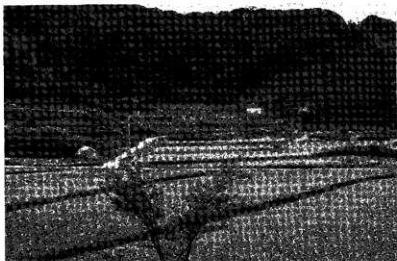
註…法量の○数字は次のとおりとする。①口径、②器高、③胴部最大径、④底厚、⑤複合口縁立上がり高さ、⑥須恵器杯身基部径、⑦須恵器杯身立上がり高さである。また、復元した計量値に※印、破損に△印を付した。

表5 大冢第3遺跡出土遺物観察表3

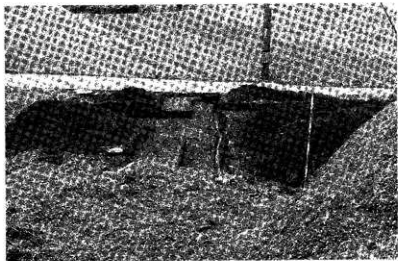
圖 版

図版 1

長和瀬谷田所在遺跡
周辺遠景（東より）



長和瀬谷田所在遺跡
トレンチ完掘状況
（南より）



トレンチ完掘状況
（東より）

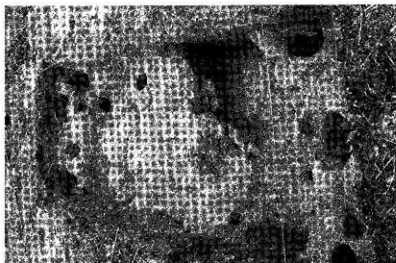


図版 2



大口第3遺跡遺景（東より）

大口第3遺跡
第2トレンチ完掘状況
（南西より）

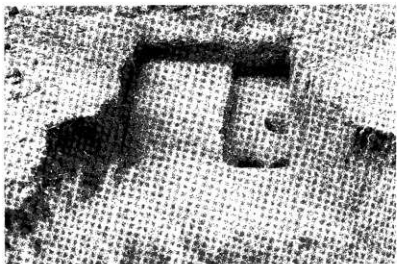


第6トレンチ完掘状況
（東より）

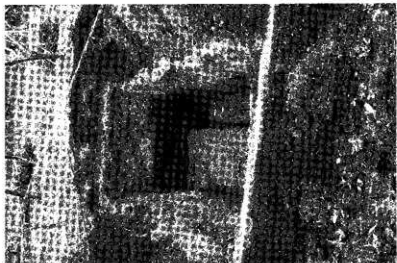


図版 3

第8トレンチ完掘状況
(西より)



第10トレンチ完掘状況
(南より)



第14トレンチ完掘状況
(南西より)

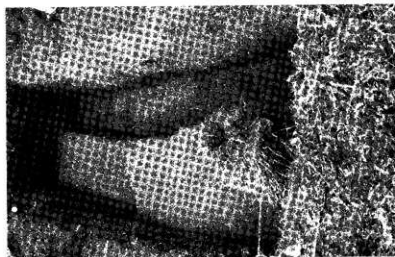


図版 4

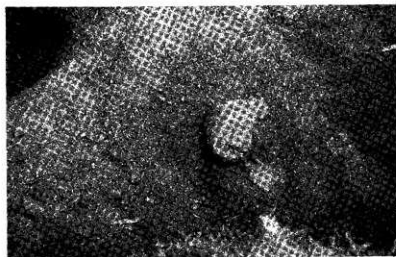
第15トレンチ完掘状況
(東より)



第16トレンチ完掘状況
(西より)

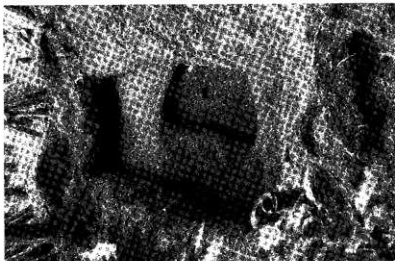


第16トレンチ
遺物 (P024) 出土状況

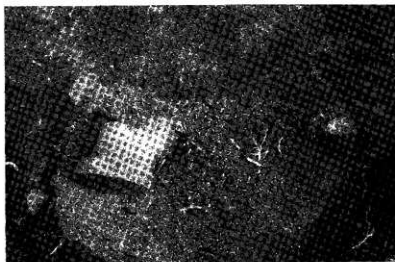


図版 5

第20トレンチ完掘状況
(西より)



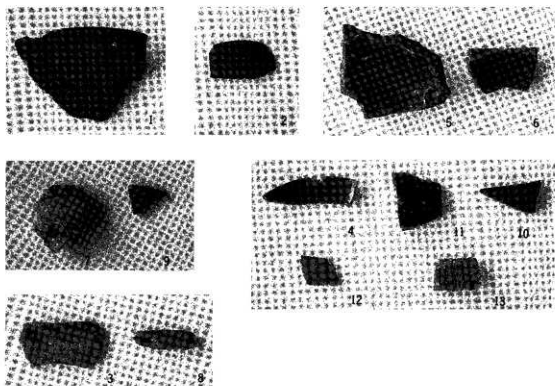
第22トレンチ完掘状況
(西より)



第23トレンチ完掘状況
(西より)

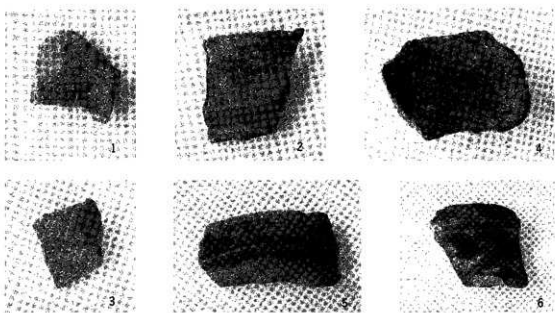


図版 6



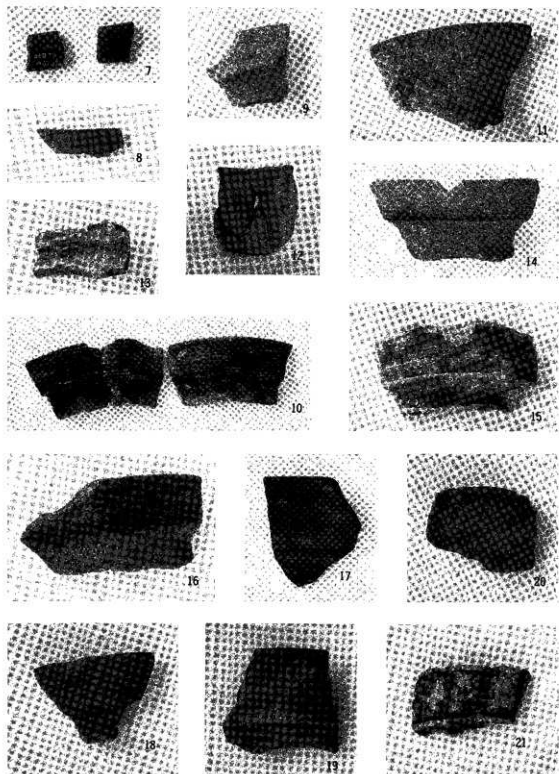
長瀬瀬谷田所在遺跡出土遺物

図版 7



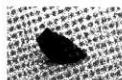
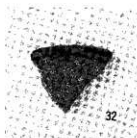
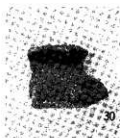
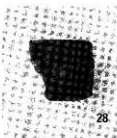
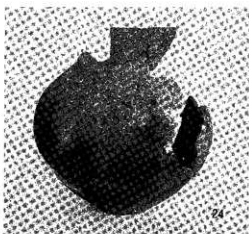
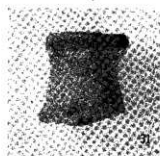
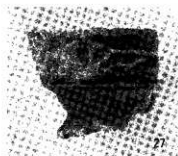
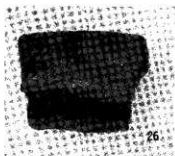
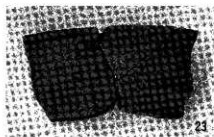
大口第3遺跡出土遺物 1

图版 8



大口第3遺跡出土遺物 2

图版 9



大口第 3 遺跡出土遺物 3

石小片 (T15出土)

青谷町埋蔵文化財調査報告書 9

青谷町内遺跡発掘調査報告書 II

(長和瀬谷田所在遺跡試掘調査)
(及び大口第3遺跡試掘調査)

発 行 1993・3

発行者 青谷町教育委員会

〒689-05 鳥取県気高郡青谷町大字青谷4047番地

T E L. (0857)85-0011

印 刷 勝美印刷株式会社

鳥取県東伯郡羽合町長瀬

T E L. (0858)35-4411